

この本を薦めます

学会誌編集委員長 佐々木 葉

第10回



西川和廣

(一財)橋梁調査会 専務理事

今回は学会誌の月評をお願いしている西川和廣さんです。橋梁の維持管理という知識積み上げでは対応しきれない仕事の源泉には、膨大な読書がありました。

西

川さんには「和尚」というあだ名があるそうだ。難しいことを、たとえ話で相手の腑に落ちるようわかりやすく説明する名人だから。たとえば、「コンクリート橋の塩害は

肝臓病です。症状が出たときには手遅れ。だから毎年血液検査をしましょう。その検査の方法と数値の読み方は……」という具合である。そういった智慧の源は、常にアイデアや表現もこの見方のヒントを探しながら読ま

進める、膨大な本にある。

多方面に多筆な渡部昇一の本は三桁は読んでいるとおっしゃる。ここでは『知的生活の方法』を挙げられた。土木研究所に入りたての西川さんが、

同僚のように賢くすいすいと仕事をこなせないという劣等感に苛まれていたとき、渡部氏の本は知性にはインテリジェントとインテリクチュアルがあることを教えてくれた。与えられた仕事を間違いない期限までに



NISHIKAWA Kazuhiro

1953年生まれ。34年あまり勤めた国土交通省を2012年に退官。そのうち30年を建設省土木研究所、国土技術総合研究所に勤務。専門は橋梁の維持管理。

仕上げる能力であるインテリジェントに對し、全体を俯瞰して何かに気づいていくインテリクチュアルな知識の重要性を説

かれ、そちらの道で自分は行けばいいという自信を得た。

次いで養老孟司と玄侑宗久げんゆうそうきゅうの対談『脳と魂』。脳科学も物理学も最先端

に進むほど仏教の宇宙観に似てくることを教えてくれる。養老氏も玄侑氏も、人が脳で考えるようにはコントロールできない自然という世界の存在を忘れてはいけない、と語る。そうした言葉に、計画、設計したとおりにいかないから手入れ、すなわち維持管理が必要なのだ、ご自身の世界を重ねていく。

最後は土木にファンの多い塩野七生『ローマ人の物語』から『すべての道はローマに通ず』。ここから道路は手段である、という徹底した思想が非常によくわかる。拡大した帝国の最前

知的生活の方法

正・続
渡部昇一：
講談社現代新書



脳と魂

養老孟司・玄侑宗久：
筑摩書房 ちくま文庫



すべての道はローマに通ず

ローマ人の物語Ⅹ
塩野七生：
新潮社



線に軍を迅速に移動させるための手段である道路。だから勾配は最小に抑え、歩行者が行軍の邪魔にならぬよう歩道があり、軍が使うから軍が維持管理する。そういった道路観をきちんと読み取っている人は案外少ないのでは、とおっしゃる。

目は活字を追いつつも、頭はほかのことを考え、読み終わったときに内容は忘れてしまつと謙遜されるが、実はそうした読み方は、とてもインテリクチュアルなのだと思う。本に書かれている情報を記憶していくインテリジェントな読み方とは違う読書。現れた事象の断片を統合して診断と対応を俯瞰的に提示する、橋梁の維持管理の真髄に通じる構えをお話から感じることができた。